

えんま大王と三人の男

「いたい、いたい。下つばらやこしがいたい。」

「かじ屋をしてせつかくお金をもうけたのに。でも、死んだおかげで、いたいところもおつた。」

「なんと、あの世の道は、さびしいもんじゃ。おーい、先に行きよるお人ー、またしゃーい」

「わたしや、軽わざしで、芸が日本一じゃった。おいしい物を食べたなら、コロリと死んでしもうた。」

途中で山ぶしも来て、三人は西へ西へと歩きつづけました。

「こりやおかしい。ごくらくへの道に、どうして角の生えたおばばがおる？」

「この道は、地ごくへ行くんじゃ。」

「や、や、まちがえた。引きかえせ。」

「今さらもどれやせん。ここで飲むなり、食べるなり、いざよく門をくぐらっしゃい。」

三人は、よつばらつた勢いで地ごくの門をくぐって行

「かまゆでだつて。わしらもいよいよおだぶつじゃ。」

「心配無用。このふつかいが、じゆ文を唱えれば、グツグツにえたぎつたお湯もたちまちぬるま湯にーっ。」

「ちちんぷいぷいの、ぷいっー。」

「ああ、ええ湯じゃ。」

「いい湯だなあはは。いい湯だな」

「うーん。かまゆでにしてもはしゃいでいるとは、かんばんならん。えんま大王がのみこんでやるっ。」

「うえつ。まつくらないぶくるじゃ。」

「そうだ。この筋を引つばろう、そおれ。」

「あいたたたたっー、うーげはっー。」

「どうにもこうにもならん男たちだ。もう地ごくにはおけん。外へほうり出してしまえ。」

「やれやれ、これでごくらくへ行けるぞ。今度生まれ変わったら、みんなのためにつくそうな。」

きました。そこへ、えんま大王があらわれました。

「えんま様の目ん玉、赤い舌は燃えるようでおそろしい。」

「これから、このえんま大王がじかじかにさばきをいたす。生きている間のことを正直に申し立てろ。」

「あ、う、かじ屋のケチ六と言われました。トツテンカン、トツテンカンとみんなのためにはたらきました。」

「山ぶしのふつかいでござる。弱い者を助けてまいった。」

「軽わざしで空とぶ男の三平と申します。おもしろい芸で、みんなをたのませました。」

「大口をたたいている。この三人の申し立てがウソか真か、この鏡にうつしてみよう。」

「うーん。わるいやつばっかり。これらをはりの山へつれて行け！」

「なんのなんの、はりの山ぐらい。かじ屋のケチ六が鉄のぞうりを作ろう。」

「軽わざしの三平が、みんなを運んでやる。とざいとうざい、いっせいいちだいの芸でござい。」

「いったい何ごとじゃ、あのさわぎは。けしからん。うん、もうかまゆでだ。」

たからゲタ

としをとつたおかあとむすこがまずしくくらしてしました。あるとき、ふとかぜをひいたおかあがきゆうによわつて、ねこんでしまいました。

「くすりをかうおかねもない よいたべものをかうおかねもない。」

こまつたむすこは、かねもちのごんぞうおじに、すこしおかねをかりようとおもいました。

「かねなんてかせない さ、はやくかえれかえれ」

「どうしたらいいべー」

むすこは、みちばたにこしをおろしてかんがえこんでいました。

「これ これ」

だれかがよぶこえがしました。

はつとして、めをあけたむすこはおどろきました。

しろいきものをきたじいさまが、目のまへにじつとたっているのです。

なんにちかたちました。

「きいたぞ きいたぞ」

うわさをきいたごんぞうおじがやってきました。

「このげたをわしにくれ。いや、くれんでもいい、いちにちだけかしてくれ」

「いいけど あまりころぶと・・・」

ごんぞうおじはおわりまでききもしないで

「わかった、わかった」

げたをかかえていってしまいました。

いえにもどつたごんぞうおじは、いっほんばのげたをしつかりはくと

まずすつてころりん

すると、ちんちゃらりん

「こ、これはこぼんだ、こぼんだ、こぼんだぞ」

「それ」

すつてんころりん ちんちゃらりん

だんだんころんでいるうちに

「む、む、こんどはこぼんがおおぼんになったぞ、なつたぞ」

でもそれはちがいます。ごんぞうおじのせいがちちん

-3-

「あ、あ、あ、」

「おどろかんでもいい」

じいさまはやさしくいうとふところからいっほんばのげたをだしました。

「ほれ、これをやろう。これをはいてひょういところぶと、ころんだかずだけこぼんがでるぞ。でもな、そのたびにせいがすこしずつちちんでしまうからな。あまりころびすぎるでないぞ」

そういうとじいさまはきえてしまいました。

いそいでいえにかえつたむすこはすぐにげたをはいてみました。

そして 「せーの」

かけこえをかけてすつてんころりん。

とたんにげたのはから、きらりとなにかとびだして、ちんちゃらりん。

みるといちまいのびかびかのこぼんです。むすこはさっそく、くすりやおいしいたべものをかってきました。

「さあすべておかあ」

おかあさんもよろこんでたべたので、すつかりげんきになりました。

-2-

でこぼんがおおきくみえるようになっただけ。

さて、げたをかしたむすこはしんばいでした。ごんぞうおじのいえにきてみると

「うわあ」

やねよりたかいこぼんのやま

「ごんぞうおじどこだ、ごんぞうおじどこだ」

ごんぞうおじはちちんでちいさなむしになっていました。

それから、おかあとむすこはこぼんといっほんばのげたをだいにして、しあわせにくらしました。

-4-

ともだちくるかな

「おもいぢがいをしているなあ、あいつは。」

ミミズクのおじいさんは、オオカミの様子を見ながら、つぶやきました。

たのしいぜ、たのしいぜ、今日はとつてもたのしいぜ。

エイ、エイ。

オオカミがうたっています。

「もうすぐ、だれかさんがやってくるぞ。オオカミさん、なーんてな。ぐふふふふ。」

- 1 -

でも、やっぱり同じです。

「どうしてだ。どうしておれは、こんなにさびしくなったんだ。」

「そ、そうだ。こころだ。心があるから、さびしんだ。

オオカミは、大声で心をはき出しました。

「こころなんか、いらぬぞー。」

オオカミのむねの中は、きれいさっぱり、からになっていました。ーフーン。おならも、のんびりと出てきます。

そこへ、きつねが、やって来ました。

「オオカミさん、おめでどう。やっと見つけたよ。はいっ、たん生日プレゼント。」

キツネが、心をこめてえらんだプレゼントです。でも、オオカミは、つまらなさそうに、首をぼりぼりかきました。

- 2 -

「うれしくないの？」

「ああ、うれしくない様だな、心をすてちまったからな。さびしくもないけどな、うん。」

「心をすてちまったの？ じゃ、これから、ずーっと、うれしい日は、一度もこないんだね。」

「これから、ずーっと、うれしい日は、こな、い…。」

「くる、こない。くる、こない。くる。くる。くる。」

オオカミは、まって、まって、まぢました。

でも、昼がすぎて夕方になり、夜になっても、まっていただれかさんは、来ません。

「ばつきやろー。何もかも忘れてやる。顔も、すがたも、声も、足音もだ。」

つぎの朝、目がさめると、オオカミは、さびしい、さびしいオオカミになっていました。

「なぜだ。なぜ、おれはこんなにしよんぼりしているんだ。」

「そうか、はらがへっているからじゃないか。それなら…。」

「ガツ、ガツ。むしゃ、むしゃ。」

おー。くった。くった。」

「はあー。」

それでも、オオカミは、元気が出てきません。

「あつ、おれは、オオカミなんだ。そうか、そうか、ちかごろいい子ぶって、あばれてなかつたせいだな。あばれりゃ気分も、すつきりするだろうぜ。」

「どけ、どけーっ。オオカミさまの、おとおりだー。」

- 3 -

むにゃ、むにゃ。」

オオカミは、今夜は、ぐっすりとねむれそうです。

「ほらな。オオカミは、たん生日を、一日早く、まぢがえていたんだよ。」

ミミズクのじいさんは、くすつとわらいました。

- 4 -